



KYOKY

117

特集

現代GP (Good Practice)

「知的財産創造・活用力を育成する教員の養成」

教員養成GP (Good Practice)

「魅力ある教職生涯支援プロジェクトin京都」

京都教育大学

<表紙>

「やさしい おに」

附属幼稚園 4 歳児 いしだ れな

ちよつとこわくかこうとおもつたの。おにつて、ちよつとこわいから。でも、かいてみたら、たのしかつた。

くろいいしは、したのほう、ほかのは、まめ。おにのかんむりもかいた。おには、かんむりをかぶつたことにして…。



(財)大学基準協会
認定マーク

このマークは、大学基準協会の定める大学基準に適合した大学が使用できるマークです。

CONTENTS



<表紙> 附属幼稚園 いしだ れな

特集

- 2 現代GP (Good Practice)
「知的財産創造・活用力を育成する教員の養成」
現代GP (知的財産教育) 副代表
岡部 美香
- 5 教員養成GP (Good Practice)
「魅力ある教職生涯支援プロジェクトin京都」
教員養成GP小委員会委員
徳岡 慶一

海外見聞録

- 8 犬も歩けば科学に当たる
数学科教授
守屋 誠司

留学生の声

- 10 Nothing is impossible
平成16年度教員研修留学生
INFANTE, CRISTINA MARCELA
(インファンテ クリスティナ マルセラ)

研究余滴

- 12 フランス都市居住者住宅管理
システムの起源
—ポルチェの仕事—
家政科教授
関川 千尋

京教今昔物語

- 14 学芸大学と教育大学の間で
美術科教務職員
小林 良子

京教学内探訪

- 16 IPCのコンピュータが新しくなりました
情報処理センター次長
中峯 浩

附属学校園だより

- 18 エネルギー教育の取り組み
附属桃山小学校副校長
川端 建治
- 19 校舎改修終了しました
附属京都小学校副校長
多田 光利
- 20 30周年を迎える帰国生徒教育研究
附属桃山中学校副校長
多羅間 拓也
- 21 キャリア教育について
附属京都中学校副校長
橋本 雅子
- 22 「おやじ会」
附属幼稚園副園長
川端 智江
- 23 第39回文化祭
「Soul to Soul—和魂洋祭—」
附属高等学校副校長
斉藤 正治
- 24 中学部・屋外作業
附属養護学校副校長
小竹 健一

非常勤講師から

- 25 私の音楽療法談
幼児教育非常勤講師
山崎 和子
- 道徳教育の授業を担当して
学校教育非常勤講師
高松 みどり

卒業生の声

- 26 美術教育とともに
京都市立鷹峯小学校教諭
竹内 晋平
- 子どもたちとともに
尼崎市立大庄小学校教諭
秋吉 舞衣子

原稿募集・編集後記

- 27 地域連携・広報委員会委員長
武蔵野 實

現代GP (Good Practice)

「知的財産創造・活用力を育成する教員の養成」

現代GP (知的財産教育) 副代表 岡部 美香

○はじめに——知的財産とは

みなさん、「知的財産」という言葉を聞かれたことがありますか。

「知的財産」とは、知的な創造活動によって産み出されたものや知的な作業を通して付加価値が付いたもののことをさします。たとえば、次のようなものが挙げられます。

- ・ 科学の領域における新しい発明
(青色発光ダイオードが有名です。昨年末にニュースで取りざたされていた疑惑のES細胞も人類の知的財産の一つになっていたかもしれません。)
- ・ 伝統的なデザインや斬新かつ独特なデザイン
(デザイナーズブランド製品やキャラクターグッズが代表的です。模倣品や海賊版を買いそうになったことはありませんか。)
- ・ 歴史的な文化財や文書
- ・ 小説・論文・絵画・音楽・写真といった著作物・出版物
- ・ 映画・アニメーション・ゲームソフトといったコンテンツ

(著作物もコンテンツも、好き勝手にダビングやコピーをしてはいけなくなっています。)

また、近年注目されているのは、地域ブランドの製品です。同じ野菜や果物でも、産地によってさまざまな値段で売られていますし、ほとんど同じ漁場で捕れた魚でも、どの港に水揚げされるかで価格が異なってくる場合があります。こうしたことは、製品に関する情報に知的な作業を加えることによって、モノそのものの価値にさらなる付加価値を付けた結果、生じます。これらも知的財産の一つです。

本学が位置する京都は、古墳群などの遺跡、世界文化遺産に代表される歴史的文化財、日本画や着物、陶器などの芸術や工芸、文芸や昔の人々の生活を記録した資料等々、伝統的に豊かな知的財産を有する地域です。さらに、そうした歴史的なものばかりではなく、島津製作所や京セラ、ローム、任天堂などの企業や京阪奈学研都市、太秦映画村などもあり、最新の科学技術やコンテンツも日々、産み出されています。京野菜や宇治茶もあります。



上：ミブナ・下：堀川ごぼう 本学教授 中西洋子氏撮影

京都教育大学では、このように豊かな知的財産を有する京都地域の特性を活かして、知的財産を創造したり適切かつ有効に活用したりすることのできる未来の子どもたちを育成する教師、つまり知的財産教育を実践できる教師を京都市・京都府、そして全国に送り出したいと考えています。

○現代GPとは

いま述べたような目的のもとに本学で進められているプロジェクトが、現代GP「知的財産創造・活用力を育成する教員の養成」です。

現代GP(正式名称:現代的教育ニーズ取組支援プログラム)とは、国内外で活躍する人材を養成するために大学教育を改革しようという文部科学省のプログラムの一環です。このプログラムでは、社会的要請の強い課題に対応したテーマを掲げ、優れた教育プロジェクトを進める大学に一定期間、財政支援が行われます。本学のプロジェクトは、2005年にこの現代GPに採択されました。

本学の現代GP「知的財産創造・活用力を育成する教員の養成」では、知的財産を創造したり適切かつ有効に活用したりする力をもつ次世代の子どもたちの育成をめざし、小学校における知的財産教育の教材や授業の研究開発とともに、そうした教材や授業を活用した小学校教員養成プログラムの構築に取り組みます。

この取り組みを通して、まずは、京都の小学生たちに、知的財産そのものの魅力とそれを保護・活用する意味や重要性を伝え、さらに知的財産を創造する喜びを体験してもらいます。そして、京都の小学校教員の方々には、知的財産教育に関する教材づくり・授業づくりのための知識や技術を提供していきます。同時に、知的財産教育を実践できる小学校教員を地域社会に輩出したいと考えています。もちろん、このプロジェクトの成果は、最終的には、京都に限らず、全国の小学生たち、小学校教員の方々へと広げていきたいと思っています。プロジェクトの継続期間は、現在のところ、4年間の予定です。

○具体的な活動内容

プロジェクトは、大きく分けて2つの組織から構成されています。研究部会とカリキュラム部会です。



まず、研究部会では、小学校における知的財産教育の教材・授業の研究開発を行っています。この研究開発活動は、京都市教育委員会、京都府教育委員会、そして市内・府内の研究協力校4校との協働によって進められています。協力して下さっている4つの小学校は次の通りで、それぞれ異なるテーマのもとで研究開発に取り組んでいます。

- ・伊根町立伊根小学校（谷川朋彦校長）
テーマ：京都府北部地域の民話
- ・木津町立梅美台小学校（南本光男校長）
テーマ：京阪奈学研都市を中心とする先端技術
- ・京都市立大宮小学校（宮下泰啓校長）
テーマ：京野菜
- ・京都市立六原小学校（小椋義一校長）
テーマ：デザイン

2005年に実施した活動を報告しますと、たとえば京野菜をテーマとするチームは、小学校で開催された京野菜の品評会に参加させていただきました。また、2005年12月7日に「なっとく京野菜 一知ろう、作ろう、食べてみようー」と題した学習会を開催し、京野菜の成立、歴史とその知的財産価値について田中大三氏（京都府花と緑の公園「花空間 けいはんな」園長）にお話ししていただいた後、平田もと子氏（ジョイフル文蛾店長）に京野菜を使った創作料理の調理法について教えていただきました。



上：大宮小学校京野菜品評会にて
下：京野菜学習会にて・京野菜料理（九条ネギのポタージュと聖護院大根の煮付けとミブナのお浸し）
本学教授 中西洋子氏撮影

研究部会では、このような学習会や研究会を積み重ねつつ、小学校の子どもたちと先生方のご協力をいただきながら、4つのテーマそれぞれに関する知

的財産教育の教材・授業開発を進めていく予定です（他のチームの活動については、本学ホームページ「現代GP（知的財産教育）」（<http://www.kyokyo-u.ac.jp/KOUHOU/gpcz/index.htm>）をご参照ください）。

さて、もう一つのカリキュラム部会は、知的財産教育を実践することができる小学校教員を本学から地域社会に輩出するために、大学における小学校教員養成プログラムの改良・構築をめざしています。この教員養成プログラムには、もちろん、研究部会で開発された教材や授業が援用されます。

より具体的に述べますと、カリキュラム部会では、大学生・大学教員・地域の小学校教員・地域の人々を対象とした知的財産および知的財産教育に関する学習会・研修会を計画・実施します。2005年には、先程述べた京野菜に関する学習会のほか、12月16日に本学附属図書館情報サービス係長・米谷昌代氏による著作権に関する学習会を開催しました。



著作権に関する学習会 本学助教授笹野恵理子氏撮影

2006年2月13日（月）16:30から「情報化時代における知的財産教育の重要性」というテーマで大阪工業大学の山名美加先生にご講演をお願いいたしました。知的財産とは何か、なぜ現代社会においては知的財産や知的財産教育が重要なのか、これらの基本的な問題について解説していただきました。

また、3月3日（金）には、日本弁理士会近畿支部の大西正夫弁理士による小学校教員対象の研修会、3月9日（木）には、大阪工業大学の佐藤薫先生による大学教員対象の学習会を開催しました。

さらに、来年度より本学の教員養成カリキュラムに知的財産および知的財産教育に関する授業が導入されます。まず初年度は、新1年生を対象に「基礎セミナー」のなかで著作権に関する基本的学習を行うほか、大阪工業大学の佐藤薫先生を講師にお迎えし、「知的財産法概論」という講義を開講します。こうし

た講義・演習は、大学教育カリキュラム研究を進めつつ、順次、増やしていく予定です。

カリキュラム部会では今後も、本学の学生・教職員のみならず、地域の子どもたち、学校の先生方、地域の人々に参加していただけるような学習会、研修会、シンポジウムなどのイベント等を企画・実施していく予定です。来年度は、同じく知的財産教育に関する現代GP「知財教育のできる教員養成システムの構築」が採択されている大阪教育大学と合同で、学校教員の方々や地域の方々、そして大学教員を対象に2回セミナーを開催することが決定いたしました。ご関心のある方は、ぜひご参加ください。

以上のようなプロジェクトの活動全体を統括するために、本学では、京都府教育委員会、京都市教育委員会、研究協力校の先生方、そして本学教員から構成される知的財産GP委員会（委員長：寺田光世本学学長）を組織しています。2005年10月26日に第1回、2006年3月15日に第2回が開催されました。この委員会は、毎年、1～2回ずつ開催され、その年度の活動の総括と評価を行い、その結果を次年度の活動推進に反映させていきたいと考えています。（委員会の全構成メンバーについては<http://www.kyokyo-u.ac.jp/KOUHOU/GPchizai/meibo.pdf>をご参照ください。）

○おわりに

知的財産は、天然資源の少ない日本の産業や経済、文化を将来にわたって安定的に持続・促進させるために、今後ますます重視されるようになるでしょう。知的財産を創造、活用、保護することは、現代の日本社会では重要な課題となっています。この社会的課題に応えることのできる教員を養成し、地域社会の教育、そして全国の教育の推進と向上に貢献するべく、京都教育大学では、この現代GPプロジェクトの活動を促進し、本学における教員養成教育の内容と方法をよりいっそう充実させていきたいと考えています。



教員養成GP (Good Practice)

「魅力ある教職生涯支援プロジェクト in 京都」

教員養成GP小委員会委員 徳岡 慶一

1 教員養成GPの概要

本学は、大学・大学院における教員養成推進プログラム（いわゆる教員養成GP）に「魅力ある教職生涯支援プロジェクト in 京都」というプロジェクトを申請し、採択されました。教員養成GPは文部科学省による補助事業で、その趣旨は次の通りです。

近年、学校教育が抱える課題が、益々複雑化・多様化する中であって、社会から信頼される学校づくりを進めるためには、高度な専門性と実践的指導力を兼ね備えた教員の養成及び現職教員の再教育の一層の充実が不可欠となっています。

このため、大学・大学院修士課程を中心とした義務教育段階の教員養成機関における、資質の高い教員を養成するための教育内容・方法の開発・充実を行う 特色ある優れた教育プロジェクトについて、国公立大学を通じた競争的な環境の中で選定し、重点的な財政支援を行うものです。

補助事業期間は平成17年度～18年度の2年間で、今年度は、申請件数101件中、国私立大学・短大合わせて34件が採択されました。

2 本プロジェクトの概要

本プロジェクトは、高度な専門性と豊かな人間性・社会性を備えた教員の養成及び質の高い学校管理職の量的確保という強い社会的要請に応えるため、京都府・京都市両教育委員会との包括協定に基づき、教員の養成段階から採用後のライフステージに応じて資質向上を図る教育内容と柔軟な履修制度を提供する教員養成系大学の大学院改革をめざすプロジェクトです。その主な特徴は、次の通りです。

ア 京都府・京都市教育委員会の包括協定に基づいたプロジェクト運営

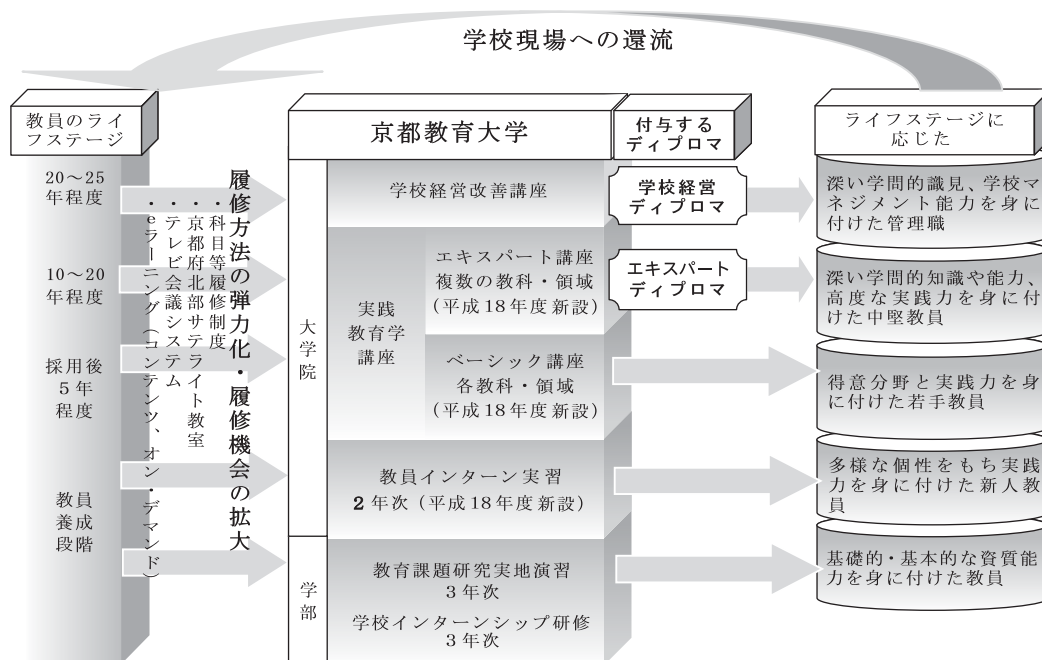
→大学、両教委、学校代表者による「運営協議会」の設置

イ 教員のライフステージに沿ってそれぞれに求められる資質や力量に応じた講座の開設

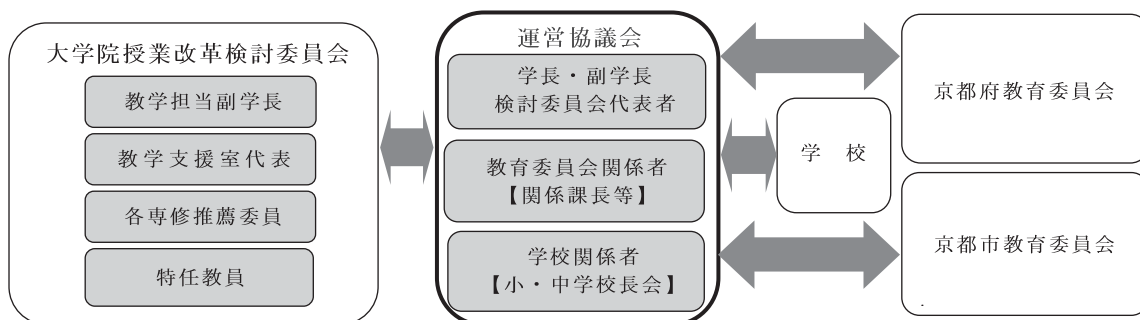
→「学校経営改善講座」「実践教育学講座」の拡充、及び「ベーシック講座」「エキスパート講座」の開設

ウ 講座をより多数の現職教員が受講できるようにするとともに、京都府北部での受講を可能にするための環境整備

「魅力ある教職生涯支援プロジェクト in 京都」のイメージ図



教員養成GPの実施体制図



→科目等履修制度の充実、テレビ会議システムやeラーニングシステムなどのIT活用、北部サテライト教室の開設

3 本プロジェクトの実施内容

では、次に本プロジェクトの実施内容を具体的に説明します。

(1) 「運営協議会」の設置

本学は、京都府・京都市教育委員会との包括協定に基づき、デマンドサイドのニーズに応じた教員養成及び現職教員の再教育を行う本プロジェクトの企画・運営・評価を行うため、本学代表者に京都府・京都市両教育委員会代表者や学校関係者等を加えた「運営協議会」を設置しました。

今年度は、第1回運営協議会を平成17年10月31日に開催し、本学からは寺田学長をはじめ役員、教員養成GP小委員会委員等19名、京都府から府教委担当課長及び小・中校長会の会長等6名、京都市からも同じく市教委・校長会から6名の参加を得、約1時間半にわたり、運営方針、実施内容及び進行計画等について活発な議論を行いました。

第2回運営協議会は平成17年12月19日に開催し、実施内容等の具体について話し合いました。そして第3回運営協議会は、平成18年3月下旬に開催し、今年度の総括及び次年度に向けた課題について話し合う予定になっています。

(2) 講座の開設

ア 趣旨

教員の養成段階から採用後のライフステージに応じて資質向上を図る教育内容の講座を大学院に開設します。なお、講座の開設にあたっては、教育委員会や学校関係者のニーズを十分踏まえます。

イ 講座の概要

「学校経営改善講座」

趣旨：深い学問的識見、学校マネジメント能力を身に付けた管理職養成

対象：管理職を目指す主任職の中堅教員

構成：3科目6単位「総論」「演習」「事例研究」履修で認定証授与

17年度実績：平成17年度1クラス開講・履修者28名

18年度計画：1クラス定員25名×3クラス開講（うち北部1クラス開講）

「エキスパート講座」

趣旨：深い学問的知識や能力、高度な実践力を身に付けたスーパーティーチャー養成

対象：高度な専門力量の形成を目指す中堅教員

構成：①各教科教育・領域から構成される1科目2単位「総論」のエキスパート講座授業科目群（12科目）から選択履修

②現代的な教育課題に対応する教科・領域については、1パッケージ3科目6単位「総論」「演習」「事例研究」履修で認定証授与
種類：②のパッケージは、国語科教育実践講座、算数・数学科教育実践講座、理科教育実践講座、特別支援教育実践講座の4つを開設します

計画：①1クラス定員25名×12科目開講（一部北部でも開講）

②1クラス定員25名×4パッケージ開講（一部北部でも開講）

「ベーシック講座」

趣旨：得意分野と実践力を身に付けた教員養成

対象：力量形成を目指す若手教員

構成：各教科教育・領域から構成される1科目2単位のベーシック講座授業科目群（7科目）から選択履修

計画：1クラス定員25名×7科目開講

「教員インターン実習」

趣旨：多様な個性をもち、実践力を身に付けた新人教員の養成

対象：＜学部新卒大学院生対象＞

内容：週6時間程度の非常勤任用（小・中学校の授業担当）

校内研修や部活動指導への参加

各学校での実地指導に加えて、大学教員も

時々学校へ出向き指導

単位認定 4月～翌年3月（通年）または集中

「実践教育学講座」

趣旨：高度な実践力を身に付けた教員及び主任職養成

対象：授業のスキルアップ及び主任職を目指す教員

実績：12科目各1クラス開講・履修者50名

計画：1クラス定員25名×12科目開講

(3) 現職教員の講座受講を促進する環境整備

ア 科目等履修制度の充実

- ・現職教員の受講を促進するため、出願手続き、関係書類や履修申請の手続きについて簡素化しました。

イ ITを活用した履修の弾力化

ウ 受講しやすい条件（場所・日時・経費等）の設定

- ①夜間、土日、長期休業期間等に講座を開設します。

- ②京都駅前サテライト教室に加え、北部サテライト教室を新規開設しました。

- ③授業料等、経費負担の軽減を行います。

- ・任命権者等の派遣又は推薦がある場合、現職教員に対する検定料、入学料を徴収しないことにしました。

- ・これによって9,800円（検定料）+28,200円（入学料）=38,000円が軽減されます。

※例えば、学校経営改善講座、エキスパート講座のように3科目を履修する場合、検定料、入学料、授業料合わせて現行では126,800円ですが、来年度からは88,800円になります。（ただし平成17年度授業料により計算）

(4) 啓発シンポジウムの開催

本プロジェクトの趣旨を、広く京都府内の教員や府民に広く知ってもらうために、啓発シンポジウムを平成18年3月5日（日）に本学および北部サテライト教室を会場にして開催します。当日は、両会場をテレビ会議システムを用いて相互に中継します。

主な内容は、シンポジウム（パネリストには文科省高等教育局担当課長、京都府教育委員会教育長、京都市教育委員会教育長をお招きし、本学学長も加わります。）、プレ講座及び講座紹介です。

本プロジェクトの詳細、平成18年度開設科目等についてお知りになりたい場合は、本学のホームページ（<http://www.kyokyo-u.ac.jp/>）をご覧ください。

講 座 一 覧

学校経営改善講座	エキスパート講座	エキスパート講座パッケージ	ベーシック講座	実践教育学講座
学校経営改善総論 学校経営改善演習 学校経営改善事例研究	教育発達相談実践総論 特別支援教育実践総論 国語科教育実践総論 社会科教育実践総論 算数・数学科教育実践総論 理科教育実践総論 音楽科教育実践総論 図画工作・美術科教育実践総論 保健体育科教育実践総論 技術科教育実践総論 家庭科教育実践総論 英語科教育実践総論	特別支援教育実践講座 特別支援教育実践総論 特別支援教育実践演習 特別支援教育実践事例研究 国語科教育実践講座 国語科教育実践総論 国語科教育実践演習 国語科教育実践事例研究 算数・数学科教育実践講座 算数・数学科教育実践総論 算数・数学科教育実践演習 算数・数学科教育実践事例研究 理科教育実践講座 理科教育実践総論 理科教育実践演習 理科教育実践事例研究	社会科教育基礎研究 算数・数学科教育基礎研究 理科教育基礎研究 音楽科教育基礎研究 書写教育基礎研究 保健体育科教育基礎研究 技術科教育基礎研究	カリキュラム開発特論 カリキュラム開発特別演習 広領域教育開発特論 広領域教育特別演習 教育工学特論 教育工学特別演習 授業コミュニケーション研究特論 授業コミュニケーション研究特別演習 授業実践研究特論 授業実践研究特別演習 教育開発リーダー研究特論 教育開発リーダー研究特別演習

犬も歩けば科学に当たる

数学科教授 守屋 誠 司



F.Heidenreich 作
1936年 Rosenthal社

私は文部科学省の「平成16・17年度大学教育の国際化推進プログラム（海外先進教育研究実践支援）」で派遣され、平成17年3月より平成18年2月までドイツ・バイエルン州のErlangen市にあるErlangen-Nuernberg Universtaetの数学研究所に研究室を借りて研修をしています。数学教育学教室のある教育学部は20kmくらい離れたNuernberg市にあるので、Erlangenから週に何日か通っています。



日独中学生同士の遠隔協同学習

私の研究テーマは遠隔教育ですから、日本からテレビ会議システム等の機材を持ち込み、ドイツの大学やギムナジウム（中等学校）に設置して、京都教育大学や神戸大学附属住吉中学校等と遠隔教育の実験をしています。また、インターネットを利用したテレビ電話を使って、日本にいるときと同じように週1回のペースで大学院生のゼミも行っています。また、附属京都小で行われた研究会にも参加できました。

Erlangenは、「地球の歩き方」には載っていませんから、一般の日本人にはなじみの無い地名だと思います。しかし、数学関係者ならすぐにFelix Kleinの「エルランゲン・プログラム」を思い浮かべる、有名なところですよ。ここは大学と電機メーカー Siemens社の街なので、知識人が多く市民は比較的裕福ではないかと思えます。そのおかげで街は非常に安全で、夜遅く一人で歩いても危険を感じたことはありません。みずぼらしい変な東洋人である私を他の人が避けているのかもしれませんが……。工学部と医学部では日本の研究者が多く働いていますし、Japanologie（日本学）学科もありますので、ドイツ語研修に来ている日本学生も20名程度いるそうです。

さて、ヨーロッパでは通りにすべて名前が付いています。これがまた楽しい。モーツアルト通り、シラー通りはおそらくどの街にもあるのではないのでしょうか。これらの人物と特に関係が無くても有名人の名前を通りに付けています。Erlangenも例外ではありません。良く使うバスはFelix Klein通りを通り、レントゲン通りのバス停で止まります。そこには Emmy Noether ホールの看板もあります。ネーターは有名な数学者です。また、近くにはオームの法則のオーム広場やオーム・ギムナジウムもあります。この二人はErlangenの出身者です。



ちょっと足を伸ばしてみましよう。StaffelsteinはAdam Riesが生まれた街です。Riesを知らないドイツ人はいないでしょう。ドイツの小学校の先生は、「計算を正しくしなさい」という代わりに「リーゼに従ってやりなさい」と言うそうです。算術の神様の存在ですね。ケプラーが晩年住んだRegensburgの家は博物館になっています。WuerzburgはレントゲンがX線を発見した場所であり、そこはレントゲ

ン博物館になっていますし、さらに、この街出身で長崎に鳴滝塾を開いた医師シーボルトの博物館もあります。いずれも Erlangen から快速列車で1時間半で行ける街です。列車で3時間かかりますが Muenchen まで行くとオームやシーボルトのお墓を見られます。



トリアーの野外劇場にて

10月末に外国人留学生のためのツアーに便乗してルクセンブルグとの国境近くの街、Trierに行ってきました。西ローマ帝国の首都だったところで、3・4世紀頃の遺跡があります。写真の劇場は楕円でしたから、もう一人の日本人と2つの焦点であろう位置に立ってしゃべってみました。声が壁に反射してサラウンドのように良く聞こえました。しかし、一人が焦点の位置からずれると全然聞こえなくなります。こんなところで楕円の数学的性質の実験ができるとは思いませんでした。

街の切手・コイン商に入ると、日本の教科書に出てきた人がたくさんいます。コインだけでも、ライプニッツ、ガウス、デューラー、コペルニクス、メルカトル、メンデルスゾーン、カント、シラー、ゲーテ、マルティンルター、……。科学をはじめそれぞれの学問分野を創ってきた国ですから、それらを明治以降に輸入してきた日本とは学問に対する思い入れが違うんでしょう。学校の授業で子ども達に見せると、良い教材になりますね。



Erlangen と Nuernberg がある大学、企業、研究所、博物館、空港などが開放され、さまざまな展示や実演が行われる科学の夜 (18:00-1:00) という祭典がありました。鉄道、バスは乗り放題です。親子づ

れでバスの中はすし詰め状態でした。産学官の協力による、人口10万と50万の街を挙げての取り組みに驚きました。



数学科のワークショップの一つ



最後に、学校の様子を少し紹介します。写真はギムナジウム・ノットブッククラスです。この生徒達は自分のノートPCを持参して数学等の授業に臨みます。私は予告なく参観させてもらったのですが、英語なら分かるという私のために、先生はドイツ語から英語による授業に切り替えてくれました。それだけでもびっくりですが、生徒と先生は平然と違和感なく英語でやりとりしているのには唖然としました。また、早朝には校内数学コンクールの表彰式をやっていました。これは5年生の部の写真。低学年ほど大きなトロフィーでした。動機付けだそうです。3位の子は、6年生の部でも入賞していました。数学コンクールの表彰式で全校が盛り上がっているのにも驚きます。

ドイツでは犬も歩けば科学に当たるでしょうか。紹介した各街には観光名所が沢山ありますが、このように数学や科学を訪ねる旅も面白いと思います。

平成16年度教員研修留学生

Nothing is impossible

INFANTE, CRISTINA MARCELA
(インファンテ クリスティナ マルセラ)

A teacher out of choice. That is me. The profession chose me and not the other way round. Ever since I can remember I have played with my little blackboard and my piece of chalk (not that any relative would induce me to it or even be in the same profession!), and I would teach German to my neighbour, or pretend I was in front of a classroom. I just loved the feeling. The truth is that teaching would not leave me, but on the contrary offer me a whole new world. It has opened doors that I would have never dreamt of. And since I have finished university I have been teaching English to elementary school children, those little delicate innocent human beings. And I truly understood and felt that teaching is the most rewarding profession, the best one I could ever have chosen. It implies a huge responsibility since we are guiding and modeling future generations. But it is also an inspiring duty, with hope for a better world.

As a matter of fact, teaching has not only inspired me and challenged me into using constantly my imagination to find new ways of teaching; it has also enabled me to make true another passion: Japan.



So, when I was first told I had the chance to come to Japan,... I just couldn't believe my luck. Around 13 years ago started my interest in this fascinating and completely different culture. And since then, I had always hoped somehow to make it to Japan. Imagine my surprise when December 2003 a friend told me there was a special scholarship for teachers to come to Japan. I went to the Japanese Embassy in Argentina and inquired about it. During my summer holidays (mid December to February) I thought about it and was sure, that somehow that scholarship

would be mine. So, in March 2004 I applied for it. Lots of papers to get. Health checkups. Examinations to take. Work everyday. By May I had my interview and the last day of July (the end of my two-weeks winter holiday) I received a call from the Embassy telling me that I not only had the scholarship but that my departure was the 4th of October. Needless to say all the things that had to be done and arranged while still working at school everyday. My adventure was only starting. I departed from Argentina on Monday and finally arrived at Kansai Airport on Wednesday evening. And ever since I have arrived in Japan, I have been hypnotized by its culture, its people, its beauty. And my luck could not have been better, since the most beautiful city of Japan, Kyoto, became my home for this year and a half.

This scholarship has and still is giving me more than just a professional improvement (I am researching on the use of computers as a tool in the elementary foreign language classroom) ...Oh dear... much more than that, it is giving me lots of friends from all the corners of this beautiful planet; the possibility of experiencing lots of things I have always wanted to learn; lots of chances I would have never dare to dream about.

The more I travel, the more I listen to people, the more I learn about this world; is the more I see how similar we all are, how we all suffer, how we all enjoy ourselves, how we love... I see and fully and deeply understand how the same we all are. Cultures may differ according to history and environment adaptability, but we are all still the same. And that is why I do hope there will come a time when we all fully understand this obvious statement but with our hearts, so as to stop indifference, to stop wars, to stop using religion and frontiers as a means of differentiating from each other; and to start caring about the millions of



children that die everyday - because of hunger, thirst or mere lack of knowledge -, to start caring about people and about this unique place called Earth. Let us use all the power we have as teachers, as guides to help future generations to make things possible. I know this sounds pretty much like a utopia, and that people "may say I am dreamer, but I'm not the only one." I could not agree more and wish as much as John Lennon. Dreams can come true. And, as far as I can see, I am live proof that everything we really wish with our hearts is possible. Since nothing, absolutely nothing is impossible. It is us, with our will and desire that make everything possible.

選択肢を失った教師、それが私である。職業が私を選んだのであり、私が職業を選んだというわけではない。チョークを片手に小さな黒板と戯れていたことが思い出される。(親戚が教職に就くようにと私を説得したわけではないし、ましてや身内で同じ職業に就いていた人などいない。)そして隣人にはドイツ語を教えていたものだ。私はただその感覚が好きだった。ただそこにあった真実は、教職という職業が私を一人きりにしないということ、そしてそれどころか逆に教職は私に新しい世界を垣間見せてくれるということであった。教職は私が夢にも見なかったドアを開けてくれた。大学での学業を終えてから、私は小学生の子どもを対象に英語を教えてきた。これらの小さく、繊細、そして無垢な生命と共に時間と場所を共有していく中で、教職はもっとも価値のある職業だと私は感じ、理解してきた。教職は、次世代を導き、そして彼らを形作るゆえ、巨大な責任を伴う。しかしそれは、より良い未来への希望を伴う、人を鼓舞するような義務である。事実として、教職は新しい教授法を見出すために想像力を絶えず駆使するという方向へと私を鼓舞しただけではなく、本当の意味でのもうひとつの異なる情熱を見出すきっかけとなった。その情熱の矛先が日本である。日本に行ける機会があると聞かされたとき、私は自分が得た幸運を信じる事が出来なかった。およそ13年前に始まった人を魅了し全く異なる文化に対する私の関心。それからというもの、私はいつも日本に来るということをいつか成し遂げたいと願っていた。2003年の12月に得た、来日に関心がある教員対象の特別な奨学金制度があると私の友人に聞かされたときの私の驚きを想像してみしてほしい。私はアルゼンチンにある日本大使館を訪れ、この奨学金制度について尋ねた。12月中ごろから2月にかけての夏季休暇中、私はそのことについて考え、そしてその奨学金は私のものになるであろうという確信を得た。それゆえ、2004年3月、私はついにその制度に申し込んだ。沢山の手に入れなければならない書類、健康診断、受験しなければならない試験の数々、

これらのものに立ち向かわなければならない毎日であった。5月までに私は面接を終え、2週間に渡る冬期休暇の終わりに当たる7月の最終日、ついに私が奨学金試験を通過したというだけでなく、私の出発日が10月4日に迫っているということを告げる電話を大使館から受けた。言うまでもなく、毎日学校へと勤務する傍ら、渡日に関する全てのことが準備される必要があった。しかしこの時点はで、私の冒険はまだ始まったばかりに過ぎなかった。月曜に私はアルゼンチンを発ち、そしてついに水曜日の夜、関西空港に到着した。ついに夢にまで見た日本に着いたのである。私は今までその文化、美に魅了され続けてきた。私の幸運がより良いものになる筈もなかった、何故なら、この1年半という期間において、日本で最も美しい街京都が私の故郷となる結果となったからだ。

奨学金制度は今も私に職業上の向上以上のものを与え続けてくれている。(私は初等教育での語学教育におけるコンピュータの活用法に関する調査を行っている。)神に誓って、これは単なる職業上の向上などといったものではない。この制度はこの美しい惑星の隅々から私に沢山の友人、私が以前から学びたかった沢山の事を経験する可能性、そして私が夢にも見なかった沢山の機会を与えてくれているのである。

旅をするほどに、人々の話を聞くほどに、この世界について学ぶほどに、私たち皆が如何に似通っているか、苦しんでいるか、楽しむか、そして愛するかということ私は理解することが出来るようになってきた。如何に私たちが同類であるかということ、今なら私はより完全に、そしてより深く理解することが出来る。文化は歴史や環境への適応性などという点によって異なるかもしれないが、しかし依然として私たちは同類である。そしてこれが、冷淡であることを止め、戦争を止め、互いを区分する手段として宗教や国境を利用することを止め、飢餓や知識の欠如といったことを原因として毎日のように死んでゆく何百万人という子どもを救い、この類のない地球と呼ばれる場所に住む人々を救うために、自分たちが同類であるということの人々が心で理解する日がいつか来ると私が願う理由である。次世代を助け、更なる可能性を生み出すために、教師、道先案内人として授けられた全ての力を使いたいと私は願う。このことがただの理想のように響き、そして人々が「私は夢見る人であるが、それは私一人ではない」と述べるかもしれないということ私は理解している。私はこの考えに完全に賛成であり、そしてジョン・レノンと同じくらいそのことを願っている。夢は現実となる事が出来る。そして、心から私たちが願う全てのことは実現可能であるということ語る上で、私は生き証人であることこれまでの経験から語る事が出来る。何もかも、全く何もかも実現不可能ということはあり得ない。何かを成し遂げたいという意味、熱望とともにあるのは私たち自身なのである。

(翻訳：学校教育教員養成課程 家庭科教育専攻 河村健太)

フランス都市居住者住宅管理 システムの起源 —ポルチェの仕事—

家政科教授 関川千尋

1. はじめに

フランスの住宅管理の実情を理解しようとする場合、ポルチェの存在とその仕事への理解は、避けて通ることができない。ここでは、このポルチェを取り上げ、その紹介をすることで、筆者に課せられた研究余滴の原稿執筆の役割を果たしたい。

2. フランスの都市居住者の住宅管理行動について

筆者は、学位論文完成後からこれまで、フランスの都市居住に関心を持ち続けてきた^{1)~5)}。その動機については、書けば長くなるので、ここでは触れない。敢えて言葉にするならば、何にも強制されず興味を持つ事ができ、自由にアプローチができ、住生活上の本質的な問題がそこにあると思うからである。

さて、第二次大戦後、既に60年が経過した。その間、日本の住宅事情は、日本の経済政策を背景に、人口の都市集中をもたらす都市地域の地価の高騰を経て、量的住宅問題の時代から、質的住宅問題の時代に入って久しい。家賃や住宅価格の上昇により、都心に住むことの出来ない住人達は、居所を都市周辺地区にスプロールしてゆく。都市居住地の拡大は、遠距離通勤問題や通勤ラッシュを引き起こした。バブル経済崩壊後、住宅地価格は下降してはいるが、日本の居住構造が即刻修正できる訳ではない。

ところで、パリは、都市集住の歴史も永く、東京をはるかに凌ぐ高密度居住を実現している。東京圏では普通のこととして受けとめられている夜間人口と昼間人口の構造的格差などは、まず見られない。職住近接で、遠距離通勤や、通勤ラッシュも少なく、30分程度でゆける範囲の中で高密度で効果的な都心居住を実現している。この点では、我々が見習うべきことは多い。

フランスは、都市居住の周辺では、移民の受入れ問題等で特に近年居住地に係わる社会問題を抱え込んではいらぬものの、都市集住様式では一定の成果を上げてきている。フランスの都市における、集住をスムーズに実現するための住宅管理システムや居住地管理システムがどのようなものであるのか？ 筆者は、これまで、フランス的住宅管理システムの理解に、特に興味と関心を持ってきた。

そもそも日本の都市集住は、平安時代頃からスタートしている。木造長屋住宅居住者は、借家人である一方、住宅管理者は基本的に家主であった。しかし、そ

れが、戦後も1970年代に入って始めてコンクリート構造による持家集合住宅居住層が現われる。集合住宅管理方式としては、これまでの日本では経験したことのない時代の幕開けであった。ここでは、居住者同士で管理組合を作り、直接的、間接的に管理人を雇う等してその管理に当たってきている。多層集合住宅の管理については、日本ではそれまで先例は無く、歴史の古いヨーロッパ等外国の例に学ぶところが大きかった。これらの諸外国に見られる管理方式は、それぞれの国の歴史を背負った形で展開されており大変面白い。例えば、イギリスでは、オクタビア・ヒルなどを排出しながら、Do it yourself. タイプの管理システムを、またアメリカでは、管理会社に全面委託した管理方式などをつくりだし、その国独自の特徴を紡ぎだしてきている。

このような中で、ここで焦点を当てているフランスでは、ガルディアン・コンシエルジュ方式の住宅管理方式を採用してきている。また、その内容はフランス独自の様式を育ててきていることが判っている。

これまで筆者は、フランスの都市住宅・住生活管理方式の内容を、現地に居住したり、INSEEの資料に当る等で調べてきたが、もう一つ、はっきりとした内容はつかめなかった。しかし、近世都市パリが変化しつつも現存しているのだから、その時代の住人の住み方とか、現代に繋がる居住システムの痕跡等に出くわしてもいいのではないかと思いつつ過ごしてきた。しかしながら、この領域の問題は、これまで、筆者にとっては、これまで、そのハードルが高く、残念ながら、状況が大きく変るといことは無かった。しかし、今回、その入口・出口が、意外な所で見つかったのである。

1992年にフランスで出版された“portier”に関する図書がそれである。現在、筆者はそれを読んでいるが、この過程で、これまで資料がみつからなかった理由や、どうしても解けなかった大きな疑問が解消していく思いを味わっている。

3. フランスのガルディアンシステムの源流

—ポルチェについて—

i) まえがき

現在、フランスのポルチェに関する本を読んでいる。筆者にとっては、寝食を忘れる位、面白い。

1992年に出版されたものであるが、たまたま筆者の目に触れることになった偶然に感謝したい。

Le portier (-ère) [ポルチェ (-エール)、() 内は女性名詞を示す。以後特別に断らないかぎり、男性名詞で代表する。] とは、17世紀以降のパリに発生した貴族を中心とする l'hôtel (邸宅) の“門番”のことを指している。公的には、スイスの傭兵がその役割を果たした例が多い事から、“スイス”と呼ばれることもある。この“ポルチェ”は、その後、歴史の流れの中で、コンシェルジュとも言われ、現在の“ガルディアン”にその呼び名を変えてきている。

旧体制下におけるポルチェの仕事は、貴族の邸宅等の“門”の開閉と、その周辺の関連事項である。馬車の出し入れ、御者の仕事等も含んでいる。彼らは、もともと、旧体制下の王統派に属する立場も持っていたが、フランス革命進行と機を一にして革命派に転じて行く。

ポルチェが日常的に住んでいる所が“la loge (管理人小屋)”であり、ここの住人であるポルチェの立場に立った 略200年余 (主として、17世紀から19世紀末頃までを中心に) のことが、この本には書かれている。総261頁で、現在約半分程度を読み終えた。原文は結構難解であるが、多少の時間が掛かっても読み終えたいと考えている。今までこの領域の課題には、何となく壁があってそれ以上進むことが出来なかったが、現在その壁もとれ、風が吹きはじめたように感じている。

ii) フランス革命の中でのポルチェの立場

……本文の翻訳から……

…我々は、ここで家事使用人であるポルチェ (門番) の板ばさみ状態を把握した。(ポルチェ) は、旧体制への忠誠と、旧体制からの独立との間にあって、不安定な状況に置かれた代表的なモデルである。: 彼等のうち相当数の者は、彼らの主人に対し、革命に関係なく奉仕を続けることを心から信じていた。

Doubline (ドゥブリーヌ) は、…国民会議の中では、倍長であったが、彼は亡命した彼の主人の公表を怠るようなことは無かった。(また) その主人とも私的な通信をとりつつ、国民会議の信頼を裏切ろうとは思わなかった。新都市国家と旧道徳の永遠のせめぎあい (が見られる)。旧体制 (l'ancien Régime) 下の…家事使用人は、他より悲劇的に生きてきたのである。革命下の市民団になることを突然命令されたり、丁寧に望まれたりして…。そして…彼らは機会を得て、ある種のイデオロギー的日和見主義を両立させる事を知った。そして、マレー地区の住宅を取り壊し、田舎に避難し、亡命した主人に対し、多くのサービスを秘密裏にもたらしたのである。

iii) 19世紀後半のポルチェの住宅

19世紀末のポルチェの状況が述べられている。ここでは、ポルチェの仕事は前世紀より多少なりとも近代的な職業としての方向が示されてはいるものの、彼らの状況は、今度は、原則として集合住宅の施設の一部として、空気と光が届かない管理人室にはめ込まれた、二本の手を持つプライバシーのない、“家主”のための職業人であることが示唆されている。そして、彼等が住む住宅である管理人住宅については、次のように記述している。

……アパルトマンの、多くの中庭は、Coquillier通り4番地のそれとよく似ている。:<< 1.25m*2mの小さい中庭が、井戸状に立ち上がっている。各部屋は、各階ともそこから光をとりいれている。:水道栓が、そこで恒常的な湿気を保っている。その上、その場所には可動性の大便つぼを置く穴がその開口部を持っている。;そこは、コンシェルジュのジャケット、彼の10歳から12歳の息子達が、結婚以来もう7ヵ月住んでいる管理人小屋の入り口に位置している。>> ……。

4. あとがき

この本の解読により、筆者の中にあるフランス独自の住宅管理システムの実情は、さらにその陰影を深めることができるはずである。今後の読解に期待している。

参考文献

1. 関川千尋：パリジャンの住宅事情と住生活、彰国社「住生活と住教育—これからの住まいと暮らし方を求めて—」、pp.45-67 (1993)
2. 関川千尋他：住生活論—家族の自立と共生のために—、第4章 住生活の経営、化学同人社、pp.87-107 (1997)
3. 関川千尋：フランスの住宅管理システムとその周辺環境について、「フローからストック社会への転換—住宅管理の社会的支援に関する研究」、都市住宅学会関西支部住宅管理研究委員会、pp.76-96 (2001)
4. 足達富士夫・関川千尋：(翻訳) 集合住宅の国際比較・フランス「戸建住宅から集合住宅へ」、日本型集合住宅の形成に関する研究 (代表者：巽和夫) pp.38-51 (2001)
5. 関川千尋：ウィーン市高齢者住宅“ハウス・マルガレーテン”—平成15年度住宅・都市事情海外視察に参加して—、「住宅」日本住宅協会、vol.52,pp.78-84 (2003)

学芸大学と教育大学の間で

美術科教務職員 小林良子



はじめに

私が京都教育大学に赴任したのは1974年5月1日であるから、今から30年も昔のことである。赴任といっても同じ年の3月31日までは本学の特修美術科西洋画教室の学生であったので、私の京都教育大学についての記憶

は、1970年以後2005年までとなる。しかし、ひとつだけそれ以前のことでおぼえていることがある。1956年に聖母学院小学校1年生であった私は、学芸大学の夏季公開講座（図画）に参加している。当時の絵と絵日記が残っているので写真で紹介しておく。学舎は今の藤森ではなくまだ丹波橋にあったころのことである。

1970年には学芸大学はすでに教育大学と名称変更されていたが、当時の先生方にも学生の中にも学大（がくだい）と言っている人が多くいた。その当時は名前が変わるだけで何も変わらないのだから学芸大学でも教育大学でもどちらでもいいじゃないかという意見があり、もう一方では名前が変わることをきっかけに変化するであろう事柄に漠然と危機感をいだく人たちがいた。昨今の度重なる学部の改組を前にしても、この名称の変更がその始まりであったように思われる。



1970年ごろの藤森学舎および近辺の自然、または風景

本学の周辺は、「とのこ」の産地であった。1970年ごろにはまだ、墨染から大学の正門まで歩いてくる途中に「とのこ」を乾かす小屋のような棚が見られた。

大学構内の樹木は今ほど大きくなく、種類も、師団の時代に植えられたもの、進駐軍の時代に植えられたもの、学芸大学になってからのもの等の区別がよくわかった。桜の木とニセアカシアの木が多く植わっている。東高西低の敷地で、まだ土の道が残っていたし、校舎も今の1号館と大学会館は鉄筋コンクリート造りで、その他は、あちこちに点在する木造校舎であった。比較的大きな2階建ての木造校舎は、もと陸軍が使用していた兵舎であり、運動場をはさんで2棟あった。1つを美術科が使用し、もう1つは理科が使用し



ていたようだが1970年にはすでに1号館A棟に移転していた。その他、通称「馬小屋」とよばれていた機械室や、進駐軍の教会あとのピアノ室があった。今はそこに植わっていた糸杉の木のみがのこっている。体育館は、それ以後に少し修理はされているがたたずまいは当時のままであり、30年以上の歳月をみまもっている。入学式や卒業式等の祭典、入試の会場にもつかわれていた。



1970年ごろの京都教育大学の諸制度について

1970年は、大阪万国博覧会開催と日米安全保障条約の自動延長の年で、4月に特修美術科の西洋画教室に入学したが、学内は学生運動の挫折感がただよっていたが、世間は万博でお祭りムード、新入生は入学できた喜びというよりも受験生の間じかに見ることが出来なかった学生運動の現場を見れるという一種やじうま根性のような気分でしたし、当時の1回生と2回生の温度差がおおきかった。

この年からそれまでの特修美術科の講座制カリキュラムから美術科Ⅰ類、Ⅱ類、特修美術科が2回生の前期末までは同一カリキュラムでいくいわゆる全美カリキュラムに変更した。入学式で配られた学生便覧に美術科のカリキュラム表は載っておらず、別刷りのカリキュラム表が配布された。当時本学は、他の教育大学のように小学校教員養成課程、中学校教員養成課程とはいわず、Ⅰ類、Ⅱ類という言い方をとっていた。このことは、本学がリベラリズムをもった大学であったことのひとつであるように思う。

入試に関しては、それ以後のめまぐるしい変更により、明確に覚えていないが、受験生用の赤本に「京都教育大学は学生数に対して敷地面積が広いので自己疎外におちいりやすいので注意」と書いてあった。ま

た、今と違った点では入試に沖縄留学生枠があった。沖縄がアメリカから日本に変換される前のことである。

教育実習については、特修美術科のことだけにかぎるが、5月に30名全員が、附属高等学校で教育実習をする。9月に京都市にある公立高等学校（堀川高校、伏見工業高校、西京商業高校、紫野高校等）へ実習に行った。2箇所での実習は良い経験になった。今でもそのときに同級生が言った言葉など一語一句覚えている。



さいごに

2005年は個人情報保護法が施行された年であり、原稿に他者の顔写真や名前を載せる場合は、必ず事前にご本人に了承を得ることが義務づけられており、居場所が不明であったり、すでに鬼籍に入っておられたりなどで人にかかわる文章を避けてしまった。柄にもなく自然についてうだうだと書いてしまったのもそのせいである。「京教今昔物語」ではなく、京都教育大学美術科逸脱史なるものでも執筆依頼がくれば、そのときは、スーチンのような油絵を描いていた沖縄の国費留学生が「パラダイスビュー」や「ウンタマギルー」を制作した稀有な映画監督になるまでのことや、アンフォルメル派の洗礼を受けた絵画の先生の変遷史など書きたいことは山ほどある。



IPCのコンピュータが新しくなりました

情報処理センター次長 中 峯 浩

平成18年2月1日より、情報処理センター内のコンピュータシステムが新しくなりました。これは、旧システムの4年間レンタルの期間が終了したことに伴う機種更新によるものです。今回は、広報誌のページをお借りして新システムの特徴などを紹介したいと思います。

○ 端末台数が増えました

やはり情報処理センターで最初に目に飛び込んでくるマシンは、端末室にずらっと並んだクライアントPCだと思います。図1は、センター1階の端末室1および2の風景です。これらの部屋には、60台（内訳は、端末室1が39台、端末室が21台）の端末が設置されています。このことで、「情報機器の操作」をはじめとした大人数の授業利用に対応しています。



図1 端末室1・2の風景 [60台の端末を設置しているので、大人数の授業に対応できます。]

最近はPCを利用する形態の授業が増えてきたようで、端末室1・2だけでは対応が難しくなっています。そのため、センター2階にある端末室3も授業によく利用されています。ただ、これまで端末室3には20台の端末しか設置されていませんでした。そこで、今回は部屋の拡張工事も行い30台設置の端末室として改装をいたしました。このことで、授業利用としての選択肢の幅が広がったと考えられます。



図2 端末室3の風景 [写真奥に見えるホワイトボードのあたりは、これまで別の部屋であった。この壁を撤去し、10台の端末を増設した。]

○ 液晶プロジェクタの設置

また、やはり最近の傾向で、講師の先生方が持参されるパソコンの画面を提示し、授業されることが多くなってきました。そのようなとき、これまでは移動式の液晶プロジェクタを借りていただき、授業のたびに設置するというを行ってまいりました。そのために、貴重な授業時間を費やしてしまうこともあったかと思えます。そこで、今回は新たに天井設置型の液晶プロジェクタ（図3）を用意しました。このプロジェクタを用いて、各先生方の手持ちのパソコン画面などを大画面に映写することが簡単にできるようになります。



図3 液晶プロジェクタ [授業のたびに設置作業をする必要がありません。]

○ 端末をじっくり見ましょう

ところで、今回の更新で新たに端末室へ設置されたPCは、富士通(株)製のFMV-E5200という機種です。図4は、本機種の概観を示します。CPUはPentium4 560 (3.6GHz)、メインメモリは2GBを搭載しています。また、インターフェースとしてIEEE1394ボードを組み込んでいますので、デジタルビデオ画像の取り込みなどが簡単にできるようになります。さらに、ドライブとしてDVDへ書き込むことも可能なスーパーマルチドライブを採用しましたので、大容量のデータをバックアップすることなども可能になります。



図4 端末PC (FMV-E5200) [スリム型のPCを机上に設置しました。]

なお、今回はPCをスリム型にして机の上に設置することになりました。これまでは、タワー型のPCを机の下(足元)に設置していましたが、PCにいや足がぶつかることが多く、またUSB機器を接続するたびに机の下をのぞき込む形になるなどの不便がありました。これらが軽減されるものと思われます。

なお、余談ですが、部屋ごとに端末PCの色が違います・・・

○ かっていい?サーバー

情報処理センターを利用される一般の方は目にする事の無い、でもとても重要な仕事をしているサーバー類も同じく更新されています。サーバーに関して、従来機種と変わったことがすぐにわかるのは、メールに関わる部分だと思えます。すなわち、SPAMメール対策機器とActive!mailと呼ばれるWebメールソフトウェアです。



図5 サーバー群 [ラックマウント型のサーバー機器が数多く設置されています。]

この数年でネットワークを取り巻く環境は大きく変化しました。個人情報保護法が施行されたことにも象徴されているように、いつでもどこでもネットワークを利用できる便利さを手に入れた代償として、大事な情報が盗まれてしまうということも残念ながら起こってしまいます。

ウイルス、スパイウェアおよびSPAMメールなどネットワークを通じて送られてくるさまざまな脅威から学内のコンピュータを保護する役割を強化したサーバーを導入・運用しています。

☆最後になりましたが、機種更新に伴い、気のついたことがございましたら、IPCまで連絡をお願いいたします。



エネルギー教育の取り組み

附属桃山小学校 副校長 川端 建治

本校は、平成17年度、経済産業資源エネルギー庁の委託によって取り組まれているエネルギー教育の実践校に選ばれ、1年生から6年生までの全学年で、エネルギー問題の学習とつながる環境教育に取り組んでいます。

この取り組みを始める前、本校では環境教育の一環として、地域別班ごとに、親と子どもが一緒になって各地域のゴミを拾う仕事集会の取り組みを続けてきました。また、自然の営みを感じることを目的とした全校ネイチャーゲームやコンテナビオトープの取り組み(3年生)、そして総合的な学習の時間に地球環境について調べたり考えたりする学習(高学年)等にも取り組んできました。学年が母体となった取り組みが中心であったこれまでの取り組みをステップアップし、全校規模で環境教育と向かい合える取り組みをということで、このエネルギー教育の実践が始まったのです。

3カ年の実践計画を貫く研究主題を、「エネルギーに着目して豊かに育つ ～かんじる・かんがえる・ふりかえる・つながる～」と設定して、各年度の実践計画を3段階に分けて取り組んでいます。

本年度は、エネルギーについて考えるための「視点を持つ」ことに力点を置いた取り組みを展開していますが、それをもとにして、18年度は、「探求する」、19年度は「発信する」ことを、それぞれの段階の実践計画作成の柱としています。

自分たちの身のまわりの生活や環境の中から、エネルギーの存在を感じ取り、エネルギーと自分の生活との関わりに興味や関心を持たせるために、教科・総合・特別活動といったさまざまな領域で、学年ごとに、取り組みの具体を考えてきました。



動くおもちゃを使った風探し(1年)

1学期初めから2学期末までの取り組みは、学年ごとに、子どもたちの発達段階をふまえた特色のあるものになっています。

低学年では、生活科の時間に、風や水といった自然の中にあるエネルギーと出会うような「動くおもちゃ」を使った探求遊びや「動くおもちゃ」づくりの学習に取り組んできました。タイヤで動くおもちゃを使った風探し(1年)や水に浮かべて動かす船づくり等の学習(2年)で、子どもたちの中には、自然の中にひそむエネルギーの存在に気づき、科学的な追求につながるような動きが芽生え始めています。

中学年では、総合的な学習の時間を使い、「身のまわりにあるエネルギー探し」(3年)を出発点として生活の中で使われているエネルギーについて見学学習や実験観察の学習に取り組んだり、「エレックさんからのメッセージ」というテーマで、自分たちの後世代の視点を取り入れて地球環境やエネルギーの問題について考える学習(4年)に取り組んだりしています。

高学年では、やはり総合的な学習の時間や理科学習の発展的な学習等で、環境ウォッチング本をテキストにして、子どもたちが自分の問題意識で学びたい内容を選んだ進める学習(5年)や、本校校舎屋上に設置された風力発電機をもとに新エネルギーについて各自が課題を持ち、追求の方法も考えて自主的に進める学習(6年)等に取り組んでいる。

今年度の取り組みを基盤に、今後は、エネルギー問題を自分の生活とのつながりで考え、問題解決のために自分の生き方を見直したり、自分から実践したりして、周りに向かって発信していける子どもたちを育てる取り組みに進めていきたいと考えています。

校舎改修終了しました

附属京都小学校 副校長 多田 光利

平成15年度の北校舎、給食室改修に引き続き、今年度は東校舎改修の運びとなりました。

夏休み開始と同時に改修に入り、夏休みの前半は改修になる教室の備品移動で、教職員もいい汗を非常にたくさんかきました。というのは、今回改修した東校舎には、第一理科室や第二理科室、家庭科室をはじめほとんどが特別教室であったため多くの備品類があり、しかもここ何年も徹底した整理がなされていないということも関係しました。しかし、大変な思いをした分、東校舎2階には普通教室ふたつ分の広さをもつオープンスペースの部屋をとることができました。

改修の基本方針は、2年前の北校舎の改修と大きく異なるのですが、次に挙げる3点です。

- ①建物の耐震性向上及び老朽改修
- ②時代の変遷に応じた設備整備
- ③学校施設の安全管理の整備と、防災上の安全性向上

この3点目の「安全管理」に関しましては、管理的な色彩が少し濃くなるのですが、



- 東校舎東側、東外庭に格子フェンスを設け、外部から容易に進入できないように。また、車の進入可能なスペースと児童の活動できるスペースとの区分を明確にする。
- 東校舎2階、3階は南側へ廊下を延伸し、その先に北校舎に設けたのと同じく、避難路を確保するための外部非常階段を付ける。
- 緊急通報設備として、各教室及び廊下より職員室、事務室への緊急押しボタン通報装置を設置する。
- 各教室に内線電話を設置し、防犯対策の一助とする。
- 各階の廊下には、不審者対応のための監視カメラを

2台ずつ取り付ける。
等を設備しました。



北校舎のときは、教室配置等を大きく変えなかったのですが、東校舎は少し教室の配置を変更し、1階は正面玄関側（校舎北側）から、受付兼事務室、コピー機や印刷機を併置した職員室、それに続いて校長室や教職員の更衣室、会議室、保健室が並びます。2階には、放送室や外国人講師控室、備品倉庫の他、前述しましたコンピュータールームも兼ねた教室ふたつ分のオープンスペースの部屋、そして、第一理科室、第二理科室等となります。3階には、普通教室3室の他、家庭科室、外国人児童学習室、児童会室があります。

この東校舎にも、当然耐震のための補強鋼材が1階の中庭側にすべて入りました。また、機能面の向上や効率的なスペース配置を図り、教室のスペースに変化を持たせ、多機能的な活用ができるようにするためスライディングウォールも可能な限り採用しました。特にオープンスペースの部屋は、廊下の壁もスライディングウォールにさせていただきました。



なお、安全面から子ども達や教職員、保護者、来賓の方々の校舎への出入りをすべて正面玄関とし、今まで子ども達の下校に使用していた東昇降口は、非常の場合と業者の出入りという形にさせていただきました。

30周年を迎える帰国生徒教育研究

附属桃山中学校 副校長 多羅間 拓也



1975年（昭和50年）に本校の帰国子女教育学級が開設され、今年で30周年を迎えます。そこで、30周年記念事業の一環として、11月22日に教育

研究発表会を開催しました。今回の研究主題は、「地域の国際化に対応する学校づくり<帰国・外国人生徒教育を通して>」で、本校が、大学と連携しながら、帰国・外国人生徒教育を通して、どのような学校づくりを志向しているか、地域の国際教育にどのような貢献をしようとしているか、について発表いたしました。当日は、文部科学省初等中等教育局国際教育課から手塚義雅課長にご出席いただくとともに、指導助言者として、佐藤郡衛先生（東京学芸大学国際教育センター）と、本学から本間友巳先生、浜田麻里先生にお越しいただきました。また、このような研究会には珍しく、100名を超える参会者を得て、数多くの指導助言をいただきました。

本校では、長年にわたる帰国・外国人生徒教育の研究成果から、「帰国・外国人生徒への指導上の配慮は、



一般生徒への指導改善につながる」さらに言うなら、「帰国・外国人生徒にとって豊かな学びが実現する学



校は、学校のすべての生徒にとって豊かな学びが実現する学校である」との信念をもって、学校全体の教育改善に取り組んできています。

現在、大学とその附属学校は、どのような形で、地域における存在意義を示すかが問われています。そこで、本校は、大学と連携しながら、教育に関する先導的な研究をしたり、学生の実地教育などの教員養成に関わる任務を果たすとともに、地域に開放された「日本語教室」の開設、地域の関係機関等と連携したネットワーク<渡日・帰国青少年のための京都連絡会>の構築、「日本語教育セミナー」の開催によるJSL（第2言語としての日本語）カリキュラムの普及活動など、地域の中に開かれた活動に取り組んでいます。

帰国子女教育学級開設30周年の節目を迎え、本校はさらにその存在意義を高めるため、新たな学校づくりに取り組もうと考えています。今後とも、関係の皆さんのご支援とご指導をお願いいたします。



キャリア教育について

附属京都中学校 副校長 橋本 雅子

本校が文部科学省の研究開発指定を受けて小・中学校の9年一貫教育システムを考える際のカリキュラムの特徴は、キャリア教育という視点を取り入れたことです。具体的に次にあげるキャリア発達能力に基づき、各教科に取り入れました。

キャリア発達領域	キャリア発達能力
① 人間関係形成能力	自他の理解能力
	コミュニケーション能力
② 情報活用能力	情報収集・探索能力
	職業理解能力
③ 将来設計能力	役割把握・認識能力
	計画実行能力
④ 意志決定能力	選択能力
	課題解決能力
⑤ 社会参画能力	社会参加能力
	社会貢献能力
⑥ 自己分析能力	自己評価能力
	自己決定能力

以上①～⑥に示すキャリア発達能力は、社会に出て役立つ能力であると考え、各教科や新教科の中で焦点化して学習することを試んでいます。

例えば、国語では、人間関係形成能力の【自他の理

解能力】に焦点をあてた場合、作品に出会い、言語活動を行うことで、自分や他者の良さや個性に気づき、様々な場面や状況に応じて多様な考えを受け止め、感情を理解し尊重するといった力が育成されると考えています。

社会科では、意志決定能力の【選択能力】に焦点をあてた場合、様々な社会現象について比較・関連させて考えたり、「自分ならどうするか」判断させることで自分の考えをもつ力を培いたいと考えています。

数学や理科でも、意志決定能力の【課題解決能力】に焦点をあてた場合、解法や結果への見通しをもち、筋道を立てて物事を解決する能力や見通しをもって観察・実験などをし、自分なりの考えを築く能力を育成したいと考えています。

さらに家庭科では、将来設計能力の【役割把握・認識能力】に焦点をあて、家族や地域の人々の役割を考え、家庭生活や地域社会において自分が果たすべき役割を認識し、衣・食・住の面から計画的に実践に結びつけたいと考えているのです。

このように各教科では、知識を埋め込むだけでなく、将来につながる学習としてキャリア教育を中核に据えたカリキュラムを開発しています。

このようなキャリア教育に視点を当てた授業は、全国的にも進められることですが、本校の先行的な実践は、高く評価を受けているところです。その点で、さらにこれらの授業の充実を図りたいと思いません。



「おやじ会」

附属幼稚園 副園長 川端 智江



平成16年度、附属高校の卒業生が育友会長にられました。近畿地区国立大学附属学校園PTA連合会、全国国公立幼稚園PTA連絡協議会などの研修会や理事会に出席され、他の校園の活動に刺激を受け、子育てに父親がもっと参加して、子どもたちが豊かな遊びの中で触れ合い、笑い合う場を設けたいと9月に「おやじ会」を立ち上げられました。

まずは、「父親に育友会や園の行事に積極的に参加してもらうように」の呼びかけから始めました。園庭開放では、お父さんと一緒に縄跳びやサッカーをしたり、ブーメランを作って飛ばしたりして遊びました。「もちつき」では初めてのお父さんも、子どもの「よいしょ、よいしょ！」のかけ声にのせられて、何臼もつきました。2月には、もっと広いところでサッカーをしようと附属小学校を借りて「親子サッカー大会」を行いました。お父さんと子どもが楽しんでいる姿を見て、じっとしていられなくなったお母さんたちも加わりました。熱のはいったお母さんが蹴ったサッカーボールが顔に当たり、泣き出す子どもがいました。

今年度は副会長と学級委員のお父さんが引き継いで、年度初めから計画していこうと夏休みに「ウォーターワールド」、12月に「おやじと遊ぼう」、2月に「サッカー大会」か「雪と遊ぼう」に決まりました。日頃、幼稚園に来る機会の少ない父親に「おやじ会」



を知ってもらうために、休日参観や納涼大会、幼稚園と育友会の合同体育大会に話をする時間を設けたり、活動の様子をプロジェクターで映したりして宣伝に努めました。また、「オヤジカイ新聞」も発行しました。

No.1水鉄砲号

8月6日の第1回おやじ会ウォーターワールドはとても楽しく大成功に終わりました。竹の水鉄砲作り、園庭で噴水やシャワーの水遊び、そしてお父さんお母さんによる紙芝居と盛りだくさんの内容になりましたが、子どもたちが大喜びで楽しい夏の思い出の一つになった事と思います。

と新聞にあります。附属養護学校での竹の切り出し、水が飛ぶようになるまでの試行錯誤などお世話されるお父さんたちは大変でした。でも、当日の親子の姿を見て次も頑張ろうと思われたようです。

12月18日の「おやじと遊ぼう」は、冬休みに親子で楽しめる遊びにしようと、ビニール袋で凧を作って遊びました。園庭では子どもが走って凧を揚げ、屋上ではお父さんが揚げた凧の糸を持って、風の力を感じていました。休み明けの懇談会では「凧揚げ」と、市販のカイトを買ってきて河原でというイメージがあって、幼稚園の子どもには無理なものと思っていたのですが、『おやじ会』で教えてもらった凧は簡単に作れて、親子で楽しみました」と話された方がいらっしゃいました。

このような機会があると、お父さんたちもちょっと無理をしても子どもと一緒に遊ぼうかなと、お母さんもお父さんに子どもを託して、ホッとした時がもて、一石二鳥かな！

「おやじ会」が定着していく事を願っています。



第39回文化祭「Soul to Soul —和魂洋祭—」

附属高等学校 副校長 斉藤 正 治



本校の文化祭は、例年生徒会執行部や委員会が中心となって企画立案して行われる。今年度は、テーマを「Soul to Soul —和魂洋祭—」とし、魂と魂がつながり、皆が一丸となって活動し、さらにその活動に和と洋を取り入れることをか

かけて、9月9日（金）、10日（土）の二日間行われた。

内容は、前日の「オープニング」に始まり、「クラス企画」「輝け附高の星」「楽祭」「展示」「模擬店」「垂れ幕コンテスト」「黄昏祭」等々多岐にわたる。

「クラス企画」：文化祭のメイン企画であり、1年生はオブジェ作成を行った。各クラスで指向を凝らした大きなオブジェが作られ、文化祭の雰囲気をもより一層盛り上げるものであった。2、3年生は中庭や多目的ホールを利用し、「演劇」「SHOW」「和太鼓」「パフォーマンス」等が行われた。各クラスがテーマを意識し、今年度は特に“質の高い文化祭”をめざすことも目標としており、“魅せる”内容のものも多かった。

「輝け附高の星」：誰にも負けないような自分の特技を披露する有志参加企画で、落語・似顔絵・暗算・楽器演奏等を特技とする生徒が、多くの観客の前で披露し、拍手を浴びていた。



「楽祭」：楽器やアカペラハーモニー等音楽に関係する内容を披露する有志参加企画で、例年同様質の高い内容であった。

「展示」：文化系クラブが、日頃の活動の成果を展示により披露（一部は舞台発表により披露）し、本校生



だけでなく、多くの一般の方々にも見ていただいた。また、2年生が海外研修旅行（マレーシア）の様子を展示により披露した。一方、例年行われている教科展示、恒例の育友会展示もにぎわいを見せていた。

「模擬店」：3年生やクラブが中心となって、工夫されたものであり、文化祭の雰囲気をもより一層盛り上げていた。

「垂れ幕コンテスト」：クラス企画宣伝用に各クラスが作成するもので、校内装飾も兼ね備え、またコンテストの対象でもある。近年、毎年行われているものでレベルアップを感じる。

「黄昏祭」：二日目の夕刻に行われる最終企画で、音楽演奏・フォークダンス・自作ビデオ上映・打ち上げ花火等が行われた。自由参加ながら、例年同様多くの生徒が参加し、文化祭のクライマックスを迎えていた。

6月から約3ヶ月の準備期間を経て行われる文化祭。本校の文化祭は、生徒が創り上げていく分、時間と労力がかかる。ただ、終わったときの達成感や生徒の嬉しそうな顔を見ていると、彼らにとって素晴らしい経験となったことを切に感じる。また、本校の伝統的な文化祭でもあると感じる。



中学部・屋外作業

附属養護学校 副校長 小竹 健一



今回は、中学部の屋外での作業学習の様子をお伝えします。この冬は特に寒い日が続きますが、本校の中学生たちは元気一杯です。

中学部の作業学習は、高等部の生活や養護学校卒業後の働くことへ緩やかに繋がっていきます。この時期の作業学習は「寒さに負けずに、汗をかくくらい体を動かそう！」のテーマの下に、友だちと力を合わせてしっかり体を動かすことや物を作るための道具の基本的な使い方を知ることなどをねらいとしています。生徒たちは3グループに分かれ、自分たちで立てた計画の下、中学部校舎周辺の屋外学習スペースの改修・改造に取り組みます。

今回は、①本校のシンボル『大亀』の棲む池周囲の植木移植 混み過ぎたさつきを掘り起こし、適当な間隔に植え直す。

②樫やクヌギの雑木林『どんぐり山』の整備 大きくなり過ぎた樹木を間伐し、それでシイタケ栽培のほだ木をつくる。

③卒業制作『小屋づくり』先輩たちが作った古い小屋を解体し、新しい小屋を作る。の3計画です。

学習の中ではメジャーを使って長さを測ったり、友だちに自分の意図や思いを伝えなければならない場



面が出てきます。つまり、養護学校の学習は『内容を理解する・分かる』だけではなく、実際に『使える・使ってできる』までが学習となります。具体的な活動を通して、算数・数学や国語、その他教科の内容を学んでいきます。このような学習の成果の積み重ねは生徒個人の中だけではなく、今の養護学校の素晴らしい教育環境となっても現れています。

《アスベストの件に関して、報告とお礼》

本校は昨年夏から秋に行われたアスベストに関する環境調査の結果、ほぼ校舎全体からアスベスト繊維が検出されました。基準値以内ということでしたが、特別教室や体育館を含む小・中・高等部の全教室が、直ちに使用禁止となり、改修工事が行われることとなりました。その間授業を行う教室がありませんので、普段は宿泊学習などで使用する生活訓練棟や特別教室棟、または大学F棟教室などを仮教室として、どうか授業を行いました。3学期には、急ピッチで進められていた改修工事が終了し、元の教室で授業が行われています。この間、多くの方々にご心配をおかけし、そしてまたご協力をいただきました。紙面をお借りして現状をご報告いたしますとともに、関係の皆様へ感謝申し上げます。



私の音楽療法談

幼児教育非常勤講師 山崎和子

仕事のかたわら人のスタートからエンディングまでを、音楽を使って療法的に支援する仕事して約10年になる。音楽療法で幼児から高齢者まで幅広い年齢層に関わるようになり、高齢者をも発達的に捉える生涯発達という知見を得た。子どもが大人になるまでの過程を発達と考えていた視野が一気に広がり、「人は一生発達する」という展望によって、高齢者を老化や衰退のマイナス面ではなく、前向きなイメージで捉えることができるようになった。また認知症も発達障害の一種であり、障害のかなり多くが発達過程の障害と捉えることができることを知ってから、発達という路線上でつまずいておられる方々なら私でも力になれると思うようになった。生涯発達と発達障害を再認識したことによって、障害についての特別な意識がなくなり大らかな気持ちで人と接することができるようになったと感じている。

実際のセッションでは、新しい経験のみ重ねつつ発達していく子どもの輝きと、経験を積み重ねた高齢

者の円熟の輝きを日々感動的に見ている。言葉が無くコミュニケーションのできない障害児・障害者が楽しいことに目を輝かせ、笑い、声を出して実にたくさんの表現をされる。また重度認知症でコミュニケーションのできない高齢者が驚くほど礼儀正しく振舞われるなど、どんなに困難な状況を抱えていても、どの方も“より良くありたいと願う存在”であることに間違いはない。老若男女を問わず、人はまさに生涯発達し続けたいと望むものなのだとことを実感している。

療法士は（明確な治療目標と計画のもと）、可能性を信じ“より良くありたいと願う気持ち”に沿って励まし援助し続けるのが仕事だが、障害のあるなしにかかわらずこれは教育や子育て一般に通じると思っている。生涯で一番希望に満ちたスタート時点の教育は大変意義深く、かつ楽しい仕事である。将来、保育士、幼稚園・小学校教諭を目指す幼児教育科の皆さんに、私のささやかな音楽療法談が何か参考になれば幸いである。

道徳教育の授業を担当して

学校教育非常勤講師 高松みどり

京都教育大学で道徳教育についての授業を担当させて頂いたのは、この後期が初めてでした。最初にお話を頂いた時には「受講者は30人くらい」と伺って、「少人数制の集中した授業」を思い描いていたのですが、実際は、受講者30人にもかかわらず大学で二番目に大きいと言われるF16の大教室で、非常にバラけた、ラフな雰囲気での授業でした。

教科書をなかなか購入してくれないことを除けば、受講者の学生さんは大半の方が、遅刻も居眠りもせず、授業中静かで、質問に対して積極的に手を挙げるわけではないものの、こちらから当てれば望ましい答を返し、また紙を配れば、深く考えたことを驚くほど論理的に表現できていました。

他方で、ただただまじめというよりは、手っ取り早く点数を稼ごうとする学生さん達も一部、見られました。私は小レポートを評価に加えることにしていたのですが、いつ小レポートを書いてもらうかはあらかじめ指定しておらず、授業の流れを見て判断し、何の前触れもなくその日いきなり書いてもらっていました。そうすると、学生さんの側でも（そろそろかな）とい

う読みがどうやら出てくるようで、ある日、受講者の人数が普段の1、5倍だった日があったのですが、おそらくあれはその「読み」だったのでしょうか。あいにくその「読み」は外れてしまいましたが。

さらに学生さんの中には、ただおとなしいだけではなく、授業に対してきちんと批判のできる方もいらっしゃいました。私はなるべく毎回、その日の授業の感想や批判を学生さんに書いてもらうようにしていましたが、その中には、授業内容や授業方法に対するものから教科書執筆者に対するものまで、幅広い批判が見られました。ただの「いちゃもん」なら無視することもできるのですが、多くが論理的根拠に基づくものでしたので、その次の授業でどのようにそれに答えるべきか、頭を悩ませたこともありました。京都教育大学の学生さんたちは、授業者に楽な授業をさせないという意味で手強い相手であり、また授業者も受講者から学ぶことができるという意味でよき助言者でもありました。これからもその批判的な視点を大切にして下さい。

京都教育大学マスコットキャラクターの募集について

京都教育大学にふさわしい大学のマスコットを選定し、学生諸君・子どもたちだけでなく広く市民のみなさんによりいっそう京都教育大学に親しんでいただけるよう、マスコットキャラクターを募集します。京都教育大学にふさわしい、親しみやすいマスコットを考えてください。たくさんのご応募をお待ちしています。

- マスコットキャラクターのイメージ
京都教育大学をイメージ出来、かつシンプルで記憶に残るもの。
- 応募資格
本学学生または卒業生
- 応募方法
作品に出品票及び著作権に関する承諾書（下記ホームページからダウンロード）を添付して、郵送もしくは直接持参してください。
- 応募締切
平成 18年 4月 28日（金）※必着
- 問合せ・送付先
〒 612-8522 京都市伏見区深草藤森町 1 番地
京都教育大学 マスコットキャラクター企画事務（総務課）
075-644-8186

詳しくは下記のホームページをご覧ください。

<http://www.kyokyo-u.ac.jp/KOUHOU/mascot/mascosyu.html>

（京都教育大学トップページ→広報・お知らせ→京都教育大学マスコットキャラクターの募集について）

第 117 号の読者の皆さまへ

KYOKYOをお読みいただきありがとうございました。

より良い広報誌を作成するため、皆さんからのご意見・ご要望をお待ちしております。

広報誌のご感想や今後取り上げてほしいこと、質問したいことなど何でも結構ですので、下記までお寄せください。

〒 612-8522 京都市伏見区深草藤森町 1 番地
京都教育大学総務課気付「地域連携・広報委員会」
E-mail: kouhou@kyokyo-u.ac.jp

117 号編集後記

広報 117号をお届けいたします。特集は本年度採択された 2つの GP (Good Practice) を取り上げました。GPは文部科学省が学生教育の質の向上などの大学教育改革の取組を選定し、財政的なサポートなどを実施しているものです。どちらの GPも採択された時期が 8月、9月であったため、まだ実施期間が短期間ですが、学内の多くの先生方のご参加、ご協力で全学的な取り組みとなっています。「現代 GP知的財産分野」は学部教育の改革、「教員養成 GP」は大学院教育の改革となります。また教育委員会や学校との連携を一層深めていく内容となっています。

海外研修中の先生、古手の先生にはユニークな記事をご執筆いただきました。「附属学校だより」もご覧のように、それぞれの附属学校が新たな課題に取り組んでいる様子がわかります。本学の平成 17年度の歩みの記録になったのではないのでしょうか。執筆の皆様にご感謝いたします。

なお表紙は附属幼稚園のいしだれなさんの作品です。のびやかな筆致と色彩をお楽しみください。

地域連携・広報委員会委員長 武蔵野 實



京都教育大学

地域連携・広報委員会

委員長	武蔵野 實				
副委員長	谷口 淳一				
委員	広木 正紀	田中 里志	樋口 とみ子	浅井 和行	
	荒木 光	安江 勉	宇都宮 博	宇野 和樹	
事務担当	総務課				



京都教育大学広報 第117号

発行日
2006年3月24日

編集
地域連携・広報委員会

発行
京都教育大学
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1
電話 075-644-8125
<http://www.kyokyo-u.ac.jp>